

石川淳論

水谷真紀

第一章 『至福千年』物語ロマンに関する一考察

①ラストシーンから

『至福千年』のラストシーンから、石川淳の文学の構造を考察する。石川淳の小説は、革命を主題とする
こと、民衆はいいないことである。

②一角の形象

登場人物の一人、一角を死のメタファーと捉え、物語の「革命」について考察する。「千年王国運動」は
物語に枠組みを与える機能と捉える。

③語り手の戦略

石川淳の散文は「語り手」によって運ばれる。文体について考察する。

④最後に・語り手について。

石川淳の語り手の自在さは江戸文学のパロディに学んだ。石川淳の江戸文学との関わりについて。

⑤ 詩語と小説言語

『雨月物語』の現代語訳を通して、石川淳の散文について語のレベルで考察する。石川淳は言葉に幻想性を認めない。

第二章 『佳人』 未満論 「空虚」な「わたし」の生成について

① 「わたし」はからっぽ

石川淳のデビュー前に焦点をあて問題点を探る。『佳人』はメタフィクションの方法だった。

② 大正末概観

作家デビュー前のエッセイから、当時どのような立場だったのか考察する。

③ 同時代ひとめぐり

当時は、時代の転換期にあたる。その精神風景を探る。石川淳はどのように時代を捉えていたのか、同時代から推察する。

④ 「否定」「生活」

『赤と黒』に焦点をあて、否定の精神について考察する。そこに現れる「生活」は、石川淳との共通点である。